

「北星学園大学問題」

2014年12月21日

北星学園大学は、「朝日新聞」の「従軍慰安婦」報道に関わった植村隆氏を非常勤講師として雇用していた。「朝日新聞」は、吉田清治氏の日本軍によって強制的に「従軍慰安婦」にさせられたという証言を受け入れ、スクープ記事として大きく報道した。その後、吉田証言は虚偽であったことが判明し、誤報を謝罪した。この件で「朝日新聞」は強力なバッシングを受け、収まりそうにない状態にある。北星学園大学は、匿名者たちから、植村氏を辞めさせるように、耐え難い罵詈雑言を浴びせられ、数件の爆破予告文を受けた。大学は学生の安全を守るため、職員を動員し、莫大な警備費を投じている。少子化の中で、学生確保も心配である。植村氏は「極右が爆破するぞ、なぶり殺してやる」などと脅迫され、高校生のお嬢さんの名前と顔写真がネット上に晒され「売国奴の娘」「自殺に追い込め」と理不尽な言葉を受けている。

「朝日新聞」バッシングが大学の人事にまで及んでいる事態は大学の自治、学問の自由を脅かす深刻な問題である。田村信一学長は当初「毅然と対応する」という声明を出したが、10月には、植村氏を来年度、雇用しない方針で検討していることを明らかにした。北星学園大学で教師をしていた友人は心を痛めていた。そして、支援の輪がどのように広がるかにかかっていると語っていた。

ところが先日、大学は植村氏を雇用継続する方針を固めた。相手の見えない卑劣な脅迫には恐怖を募らされる。植村氏はじめ、大学側は悩み抜いただろうが、大学の自治と学問の自由を守ろうと決断した。右翼に屈したら、どの大学でも起こりうる脅迫に対抗できなくなるといふ危機感を持ったのであろう。そして、大学を支える内外の世論の後押しがあった。多くの苦労があることは確かであるが、耐えて乗り切りたいと心から願う。

『週刊金曜日』は、大学で行われた留学生日本語スピーチ大会で語った韓国人の姜明錫君のスピーチを掲載している。「先生（植村氏）は昔、新聞記者として書いた記事の結果、社会的に抑圧されました。でも、言論と大学は、社会で自由に声を出せるよう守られるべき機関です」「日本が自由でなければ、隣の韓国も影響を受けます。先生の問題は、日本の言論、学問の自由を試す大事件です」「この国の自由のために、先生を応援して下さい。」姜君は、植村氏が日本文化などを教える「国際交流特別講義」の受講生である。教え子の訴えに、植村氏は涙が止まらなかったという。

北星学園大学の受難は時代のいびつさを投影している。まず、名前を名乗らない脅迫文の問題である。私の責任において、こう発言するという時、相手と対話ができ、その言葉は生きている。名を隠しているところには、相手を痛めつけようとするだけの萎えた精神しかない。この傾向が強くなっているのではないか。そして最近、ヘイトスピーチに代表されるように、国家主義的、右翼的発言が多くなり、勢いづいている。これは、安倍政権の動向と連動している。政権担当者に極右者と関係を持つ人が多い。異論を許さない社会的雰囲気醸成されている。「なぶり殺してやる、自殺に追い込め」などという言葉は明らかに犯罪であるから、これらの犯罪を問題にすることの方が先決であるはずである。衆議院総選挙で、政府はメディアに対し、公正な報道をするようお願いしたそうだが、自分に都合の悪いことには口出し、都合の良い右傾化の犯罪は黙殺している。また、「この道しかない」という考えは危険である。批判する他者を持つ時、事柄は正しく、豊かに展開していく。弱者を見捨て、批判者を貶める社会であってはならない。